

# 埋蔵文化財発掘調査報告書

藤橋遺跡

1977

長岡市藤橋遺跡等発掘調査委員会

## 序

この調査報告書は、道路拡幅工事に伴う藤橋遺跡の一部を発掘調査した記録です。

このたびの調査対象となった藤橋遺跡は、はるかに信濃川を望む西部丘陵地帯にあって、以前から地元民によって土器や石器等の出土品が確認されていたところであります。

申しあげるまでもなく、文化財はその地域や、わが国の歴史を正しく理解するために欠くことのできないものであり、かつ、将来の文化の向上発展の基礎をなすものであります。今回の調査によって発見された遺物や住居跡をみると、ここにあらためて、古き時代をしのび郷土に対する愛着を一層強くするものであります。

この調査は、長岡市が長岡市藤橋遺跡等発掘調査委員会に委託をして実施したものであり、この報告書は、その調査結果にもとづくものであります。

今後、出土品とともに、文化財の理解と認識を深めていくうえで活用される事を切望してやみません。

最後に、今回の調査にあたりご指導、ご助言をいただいた関係機関はもとより、ご協力いただきました関係者に対し心からお礼申しあげます。

昭和52年3月

長岡市藤橋遺跡等発掘調査委員会

委員長 山田幸男

## 例　　言

1. 本報告書は長岡市藤橋遺跡を通過している道路の拡幅工事に伴い、長岡市藤橋遺跡等発掘調査委員会が長岡市から委託を受けて実施した事前の発掘調査の記録である。
2. 調査は昭和51年9月15日から11月30日まで実施した。発掘調査は駒形敏朗が担当し、寺崎裕助・神林昭一が調査員として専従した。また、中村孝三郎氏には相談員として考古学的な御指導をいただいた。
3. 遺物の整理復元には調査員があたり、本多昌治の協力があった。遺物の実測・写真撮影および図版等の作成は駒形と寺崎が担当した。
4. 本書は分担執筆したもので、文末に執筆者の氏名を明記した。
5. 本文中における氏名は敬称を略させていただいた。
6. 第5図及び第6図において、ドットは礫を、斜線は土器を指す。
7. 発掘調査から遺物整理および本書の作成まで、下記の方々や機関から御指導・御協力を賜った。深く感謝します。（五十音順・敬称略）

安孫子昭二、家田順一郎、可児 通宏、金子 拓男、樽井今日子、柔野 一幸、  
小林 達雄、斎藤 基生、閑 雅之、高橋 保、高橋 陽子、竹田 祐司、  
多々 静治、種村 貞二、坪井 清足、戸根与八郎、豊巻 幸正、中島 栄一、  
波多野至朗、羽根川康信・チヨ、原田 亨二、樋田 直人、深井 義春、星山  
芳樹、本間 信昭、前山 精明、宮崎 博、雪田 孝、若松 茂、株式会  
社 竹中工務店、小山農機、長岡市深才連絡所、長岡市立表町小学校

## 目 次

I 調査の経過 .....	1
1. 発掘調査に至る経過.....	1
2. 発掘調査の経過.....	1
II 遺 跡 .....	1
1. 遺跡の立地.....	1
2. グリッドの設定.....	2
3. 土 層.....	2
III 遺 構 .....	3
1. ピット群.....	3
2. ピット群出土遺物.....	6
3. 第 2 号溝.....	8
IV 遺 物 .....	9
1. 繩文土器.....	9
2. 土 製 品.....	12
3. 石 器.....	14
4. 須恵器.....	14
5. 中世陶質土器.....	14
V ま と め .....	16

## 図版目次

図版第1図 遺跡遠景・遺跡近景	群B—10~12P
図版第2図 ピット群A・ピット群B	図版第4図 ピット群出土遺物
図版第3図 ピット群A—15P・ピッ ト群A—12P・ピット群 A—4P・ピット群B— 26P・ピット群A—12P ・ピット群B—7P・ピ ット群B—15P・ピット	図版第5図 第2号溝 図版第6図 繩文土器 図版第7図 繩文土器 図版第8図 繩文土器・土偶・石器・ 須恵器・中世陶質土器

## 挿図目次

第1図 藤橋遺跡位置図.....1	第9図 ピット群出土遺物.....7
第2図 土層柱状図.....2	第10図 第2号溝実測図.....8
第3図 グリッド設定図.....2	第11図 繩文土器.....10
第4図 ピット実測図.....3	第12図 繩文土器.....11
第5図 ピット群A実測図.....4	第13図 繩文土器・須恵器・ 中世陶質土器.....13
第6図 ピット群B実測図.....4	第14図 石器.....15
第7図 玉.....6	
第8図 ピット出土石器.....6	

## 表目次

第1表 ピット群出土遺物対照表.....6
-----------------------

## I 調査の経過

1. 発掘調査に至る経過 長岡市は魅力ある地方中核都市づくりを進めているが、その一環として市の西部丘陵地区の総合的な開発事業計画を発表した。こうした状況のもとに藤橋遺跡の一部に市道深才第56号線及び第55号線が拡幅されることになり、道路敷部分の発掘調査の必要が生じた。このため市は長岡市藤橋遺跡等発掘調査委員会に調査を委託し、昭和51年9月中旬から発掘調査を開始した。

(本多 昌治)

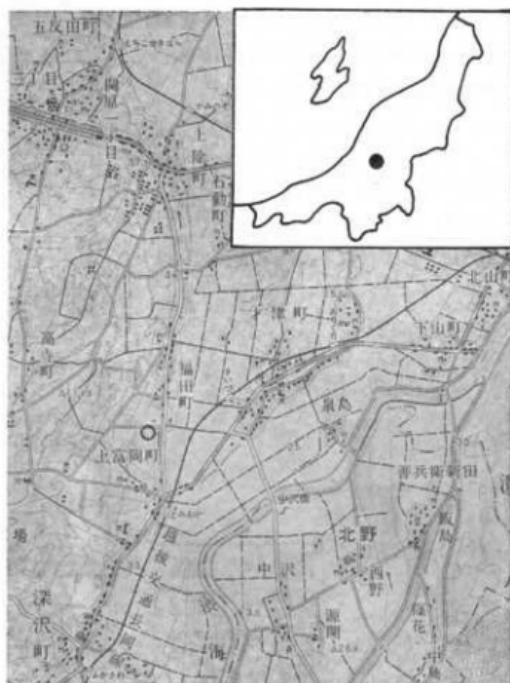
2. 発掘調査の経過 本調査は道路拡幅予定部分を発掘対象地として、遺跡の西側から着手していった。試掘調査で発見された黒色土の落込みの多くが绳文晩期の土器を伴う柱穴群であり、東西2ヶ所に分布し、試掘調査で推測されていた遺状集落の一部であることがより明確になった。また、東西の柱穴群にはさまれて第2号溝も新たに発見された。 (駒形 敏朗)

## II 遺跡

1. 遺跡の立地 信濃川は長岡市附近の左岸地域において深沢面、上富岡面、高寺面、関原面の4河岸段丘を発達させている。本遺跡はこのなかの深沢面に立地し、福田町南方の、南北を2つの浅い小谷にはさまれた標高30~50mを測る低い台地上に位置している。この低い台地は東へ舌状にのびて、沖積面に没するがその比高差は約5mあまりである。

(寺崎 裕助)

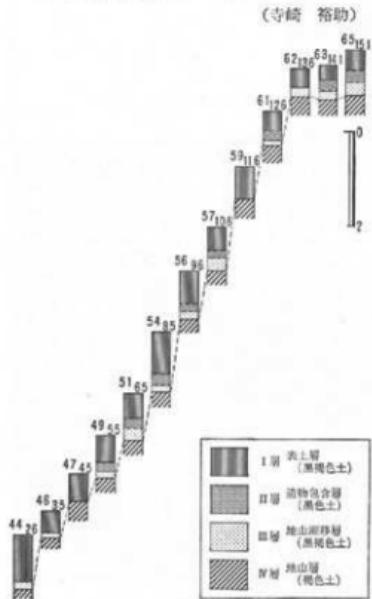
註 新潟平野固体研究グループ「十日町盆地の河岸段丘」地質学論集 第7号昭和47年



第1図 藤橋遺跡位置図 (1 : 50000; 長岡)

2. グリッドの設定（第3図） 本調査のグリッドは試掘調査時のグリッドのX軸1以西をそのまま使用し、南北線をX軸、東西線をY軸として数字による名称を用いて設定した。このため、道路の南側は階段状に発掘することになった。Y軸1以東は道路拡幅予定地を道路に沿って10mごとに区画し、西からA・B…Oとアルファベットを用いた。（駒形 敏郎）

3. 土層（第2図） 本遺跡の土層は色調及び混入物等をもとにⅠ層表土層、Ⅱ層遺物包含層、Ⅲ層地山漸移層、Ⅳ層地山層にわけられ、Ⅱ層の堆積は約6~12cmを測る。(59, 116) 付近の堆積は表土層中に地山層のブロックが混在しており、後世の擾乱を受けたものと推測される。(46, 35)~(40, 1)ではⅡ層が発達しておらず、遺構も確認されなかった。



第2図 土層柱状図



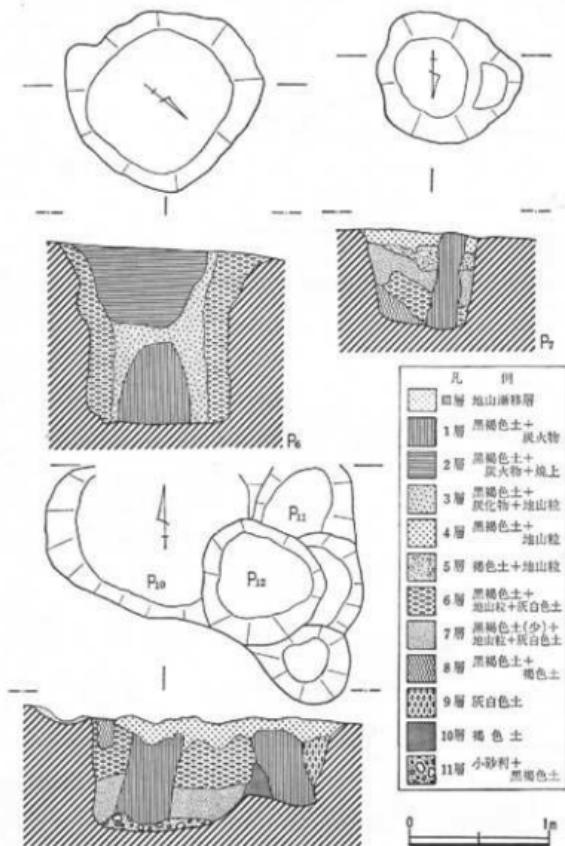
第3図 グリッド設定図 (1:3000)

## Ⅱ 遺構

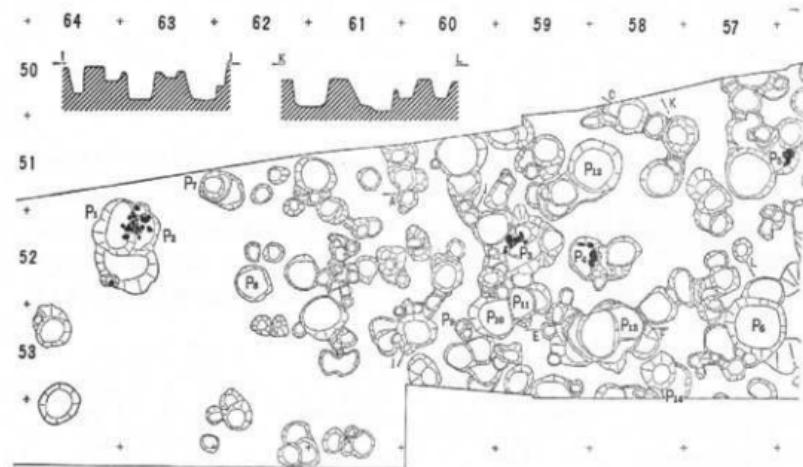
1. ピット群（第4～6図、国版第2・3図） 100基をこえるピットがY軸51～64とY軸88～105とに分布しており、前者をピット群A、後者をピット群Bとした。このピット群は試掘調査時において発見されていた黒色土の落込みであり、遺跡全体の規模から考えると北東に開く窓状を呈するように配置されていた。これらのピットの多くは第4図で示すようにその規模にかかわらず、掘り方と柱痕とが明瞭に区分され、柱穴であったことが推察される。第4図における第1～3

層は柱痕で、廃絶後黒色土等が埋ったものと思われ、第4～10層は柱をおさえるための土砂と考えることができよう。ピット群Aの3P～5Pの底部に根固め石がみられることなどからもピットの多くは住居に付属する柱穴であったと裏付けられる。しかし、柱穴の配列や各柱穴間の対応関係を把握できず、しかも炉址や周壁・周溝も発見されず、どのような形態の住居であったのかは不明である。

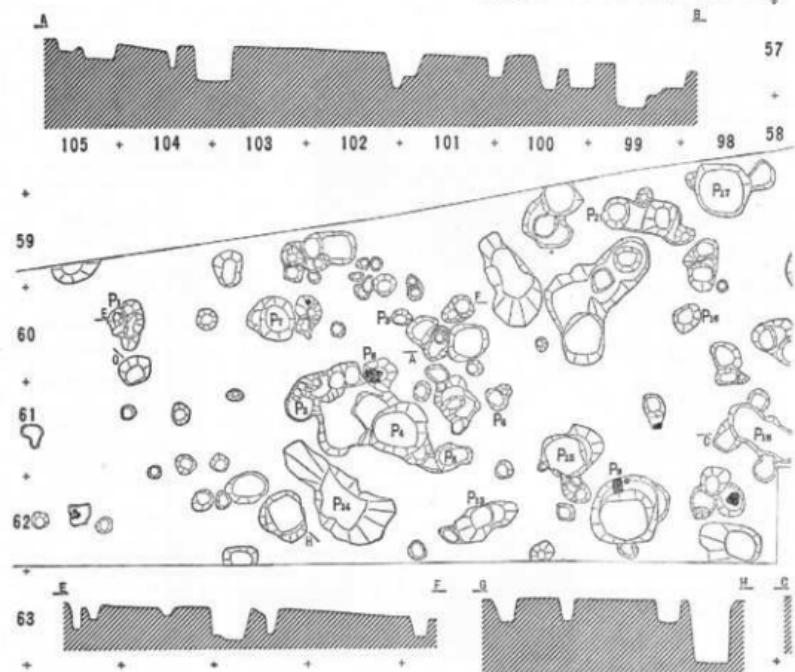
（駒形 敏朗）



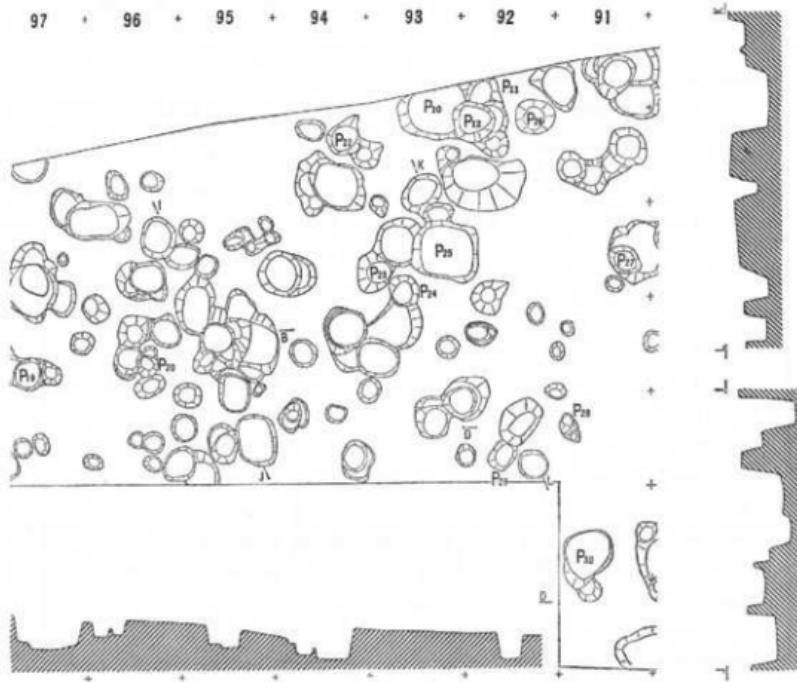
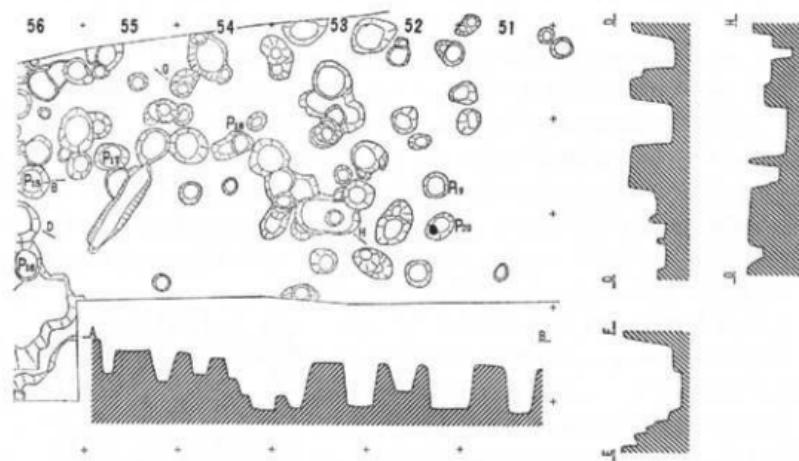
第4図 ピット実測図



第5図 ピット群A実測図 (1 : 120)



第6図 ピット群B実測図 (1 : 120)



2. ピット群出土遺物 ピット群A・Bで遺物を出土した柱穴は約50基を数えるが、その多くは縄文土器の小破片であり、ここではその代表例をあげた。

(1) ピット群A出土遺物 (第7図、第8図1~4、第9図1~21、図版第4図1~9) Aからは縄文晩期の大洞BC式~A式の縄文土器を伴うピットが多く検出された。13P・17Pは大洞BC式の土器を出土している。13Pからは注口部の周間に羊歯状文を施した土器片が、17Pは黒褐色を呈する小破片に羊歯状文を施した土器が出土している。この17Pからは自然石の陵線を利用した小さな玉も出土している。3P・15P・18P・19Pは大洞C<sub>1</sub>・C<sub>2</sub>式の雲形文の土器を出土したピットで、18Pには注口土器の上半部片に伴って、口縁に沿って3条の沈線を施した綾格縄文の土器が出土している。大洞A式の工字文の土器は1P・11P・12P・16P・19P・20Pから出土し、16Pは羽状欄文の土器を伴っている。ピット群Aで石器を出土したのは4Pの磨製石斧、5P・7Pの石鏃で、7Pの石鏃のうち1本(第8図2)は柄部にアスファルトが付着していた。



第7図 玉  
(1:1)



第8図 ピット出土石鏃  
(1:2)

出 ピット	捕 図番号	国版番号	出 ピット	捕 図番号	国版番号	出 ピット	捕 図番号	国版番号
A-3P	9-1		A-18P	9-17・18	4-5	B-16P	9-44	4-16
A-4P	9-2		A-19P	9-19・20	4-6・7	B-17P	9-45・46	4-17・18
A-5P	8-1		A-20P	9-21	4-9	B-18P	9-47・48	4-19・20
A-6P	9-3・4		B-1P	9-22	4-10	B-19P	9-49・50	
A-7P	8-2~4		B-2P	9-23	4-11	B-20P	9-51	4-21
A-8P	9-5		B-3P	9-24		B-21P	9-52	
A-9P	9-6・7	4-1	B-4P	9-25~27	4-12・13	B-23P	9-53	
A-10P	9-8		B-5P	9-28・29		B-24P	9-54~56	4-22・23
A-11P	9-9		B-6P	8-5		B-25P	9-57	4-24
A-12P	9-10		B-7P	9-30	4-14	B-26P	9-58	4-25
A-13P	9-11	4-2	B-8P	9-31~34	4-15・28	B-27P	9-59	4-26
A-14P	9-12				29	B-28P	8-6	
A-15P	9-13	4-3	B-9P	9-35~39	4-30・31	B-29P	9-60・61	4-27
A-16P	9-14・15	4-4	B-13P	9-40		B-30P	9-62・63	
A-17P	7	4-8	B-14P	9-41				
		9-16	B-15P	9-42・43				

第1表 ピット群出土遺物対照表(註1)



第9図 ビット群出土遺物 (28・31・32・39…1 : 6, 他は1 : 3)

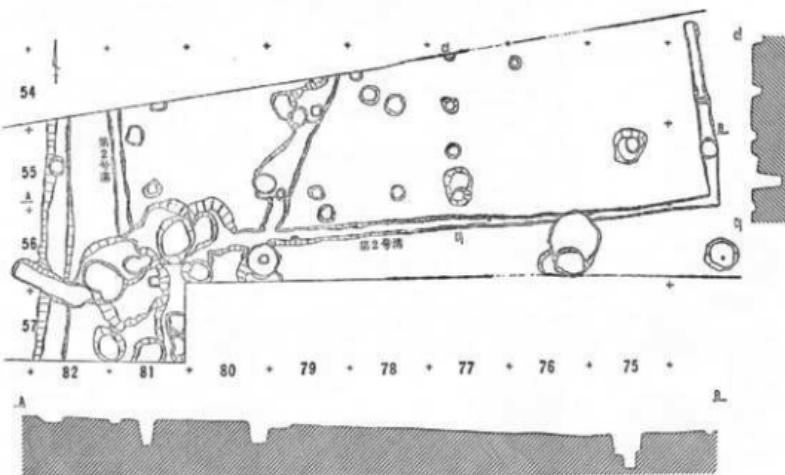
(2) ピット群B出土遺物（第8図5・6、第9図22~63、図版第4図10~31） Bでは大洞A式の土器を出土するピットが多く、1P・4P・8P・9P・14P・15P・19P・20P・23Pの9基を数える。8Pでは底面に網代痕のある浅鉢形土器に伴って、胴部に2条の綾格縦文を施した小形の深鉢形土器が出土している。9Pからは体部に工字文のある小形浅鉢形土器と綾格縦文を全面に施した深鉢形土器が伴出している。Bでは大洞A式の他に三叉文の大洞B式が2Pで、羊歯状文の大洞C式の土器が24P・27Pで、大洞C<sub>1</sub>・C<sub>2</sub>式の雲形文を施した土器が7P・17P・18Pから出土している。この他、25Pから多孔底土器の底部が1点出土している。石器としては板状石器が16P・26Pから、石鏃が6P・28Pから出土している。

（駒形 敏朗）

註1. 第1表は各出土遺物を紙数がないため紹介することができず作成した。出土ピットのA・Bはピット群A・Bの時、挿図番号の左の番号は第7~9図を指し、右の数字は第7~9の図中の拓影等の番号を指す。図版番号の左側は図版第4図を指し、右の数字は図版第4図中の写真番号である。

3. 第2号溝（第10図、図版第5図） ピット群AとBの間の（54~56、74~82）で幅約30cm、深さ約10cmの細い溝が検出され、第2号溝とした。第2号溝の規模・形態は東・西辺及び北辺が未発掘のため詳細は不明である。第2号溝の南西コーナーは縄文晩期の土器を出土するピットの埋没後に構築されており、また、周囲で中世陶質土器が出土していることから、第2号溝は中世の所産と考えられる。第2号溝の周辺や内のピットは規模・形態が異なり、法則性も見だせず、第2号溝も含めてその性格を知ることができなかった。

（駒形 敏朗）



第10図 第2号溝実測図 (1 : 140)

## IV 遺 物

本調査で出土した遺物は縄文土器・石鐵・石斧等の縄文時代のもの他に、須恵器が1点、中世陶質土器が5点出土した。縄文時代の遺物量は平箱約75箱である。

1. 縄文土器 本調査で出土した縄文土器は後期から晩期全般にわたっており、その出土量は平箱約70箱で、晩期後葉のものが主体を占め、後期前葉のものがそれに次いでいる。

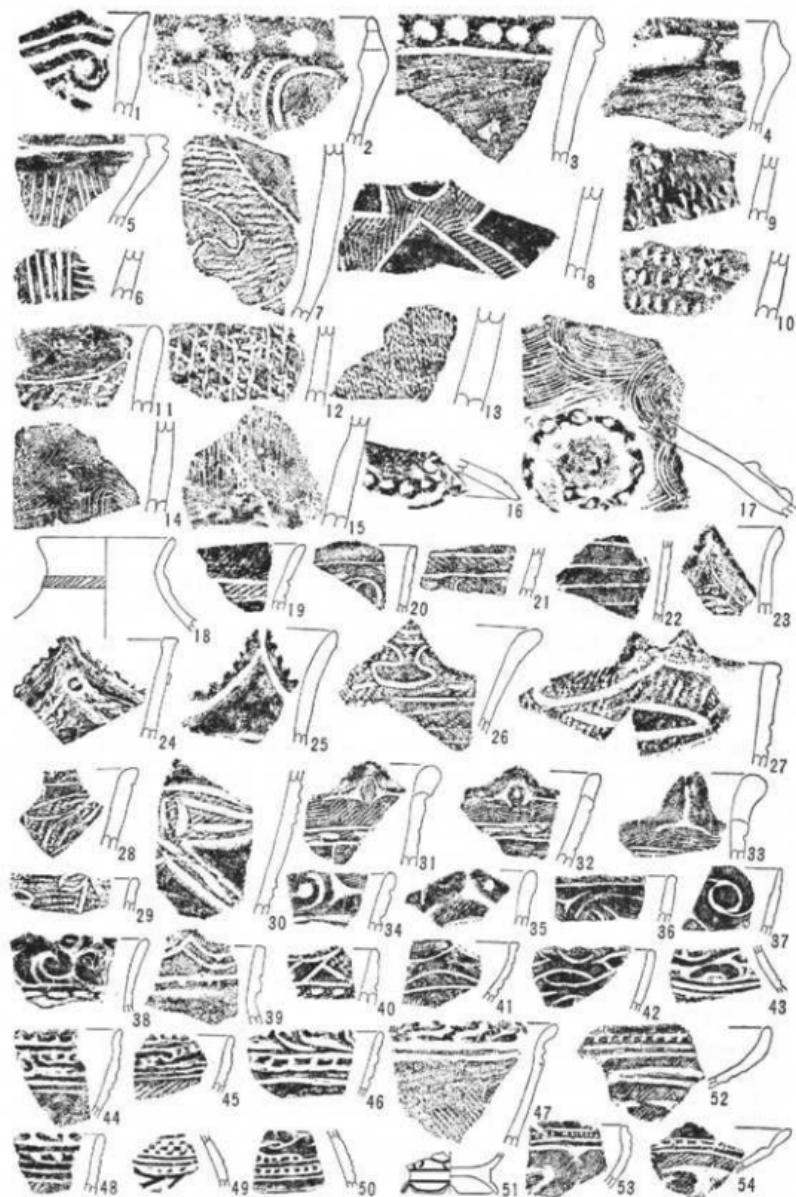
中期前半の土器（第11図1、図版第6図1） 中期に属する土器はこの1点だけである。この土器は山形口縁の破片で、半隆起縁でもって渦巻文をえがいている。

後期前葉の土器（第11図2～17、図版第6図2～25） このグループは遺跡東端の沖積面に近いところからまとまって出土し、後期前葉の三十稻場式と思われる。第11図2～5はやや内傾する口縁部に文様を施した縁帶文の土器で、2は同心円文を、5は斜線を胴部に施文している。6は5の下部文様と思われる。図版第6図6～11は橋状把手あるいはそれが退化して隆線に置き換えられた土器である。11は橋状把手の下に刺突文が施されている。図版第6図18は橋状把手の土器で、胴部に縄文をヘラで区画して磨消した文様をついている。第11図7・8は縄文地上をヘラ状工具で区画した磨消縄文で、8は直線的である。7は図版第6図18と同じ文様と思われる。第11図9・10は深鉢形土器の胴部に刺突文を施した土器で、三十稻場式を代表する文様である。第11図14・15は櫛状工具によって直・曲線をえがく条線文の土器である。図版第6図22～25は橋状把手の土器と対になる蓋形土器で、22・23は円形刺突を加えた隆線を弧状に貼りつけ、24はその隆線の周辺に条線文を施している。25は高い突起をつけている。

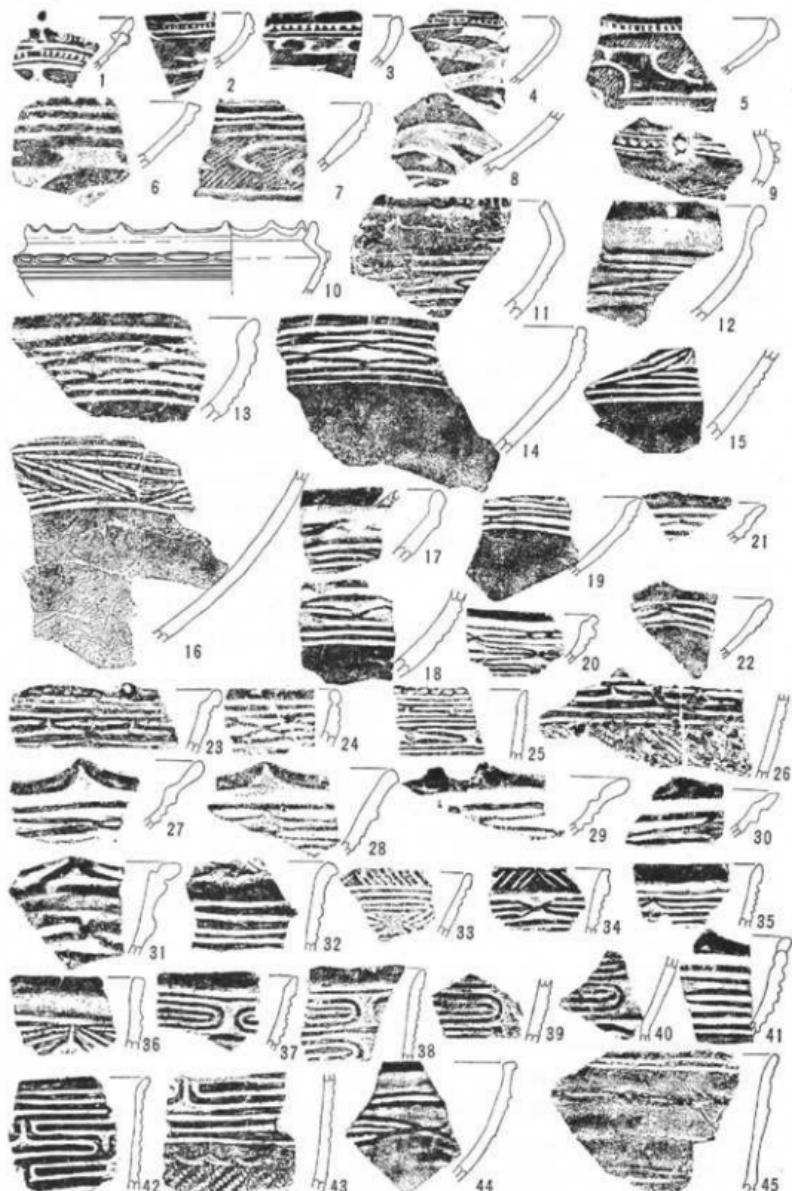
後期中葉の土器（第11図18～22、図版第6図26） 黒褐色を呈するものが多く、直線的な磨消縄文を施している土器群で、三仏生式に比定されると思われる。第11図18は口縁がゆるく外反する壺形土器で、頭部に縄文帯を1条めぐらしている。

後期後葉の土器（第11図23～30、図版第6図27～31） 後期後葉の塔ヶ峰式に対比される土器群で、茶褐色ないしは黒褐色を呈している。第11図23～25は山形口縁の土器で、24・25は口縁に刻目を加えている。23・24は縄文を弧線状に残るように磨消し、24は弧線の頂点に瘤を貼付けている。30は23・24と同じ手法の弧線連結文で、玉抱き三叉文に近いモチーフをえがいている。26・27はA突起の口縁で、沈線を縄文地上に曲線的に走らせている。28・29もほぼ同じモチーフをえがいている。

晩期前葉の土器（第11図31～51、図版第6図32～46、図版第7図1～2） 文様モチーフの主体が三叉文である大洞B式併行のもの（第11図31～43）と、羊齒状文の大洞B C式のもの（44～50）にわけられる。31～33はA突起の口縁部破片で、31・32は突起部に玉抱き三叉文を施し、下部に刻目をはさんだ2条の沈線が縄文地上を横走している。34・35も玉抱き三叉文が施文されたものである。37～43は三叉文が変化した入組沈線文の土器である。43は注口土器の上半部破片であろう。51は底辺を4ヶ所切り込んだあげ底の土器で、三叉文に近い文様が一部に



第11図 繩文土器 (52…1 : 6, 他は1 : 3)



第12図 開文土器 (10-1 : 6、他は1 : 3)

認められ、大洞B式のグループに入るものと思われる。44~48は口縁部に羊歯状文を施し、胴部に縄文を施文した深鉢形土器で、44・45は口縁に刻目を加えている。49・50は注口土器と思われる器形の上半部破片で、羊歯状文が施されている。

**晩期中葉の土器**（第11図52~54、第12図1~9、図版第7図3~11） 体部に雲形文を施す大洞C<sub>1</sub>・C<sub>2</sub>式のグループである。第11図52~54、第12図1~5は口縁に沿って刻目が加えられている。第12図1は3個の瘤を突起にもつ浅鉢形土器で、朱が塗られている。第11図54・第12図8は黒うるしがかけられている。これらは浅鉢形土器で、色調は褐色を呈するものが多く、焼成は良好でかたい。

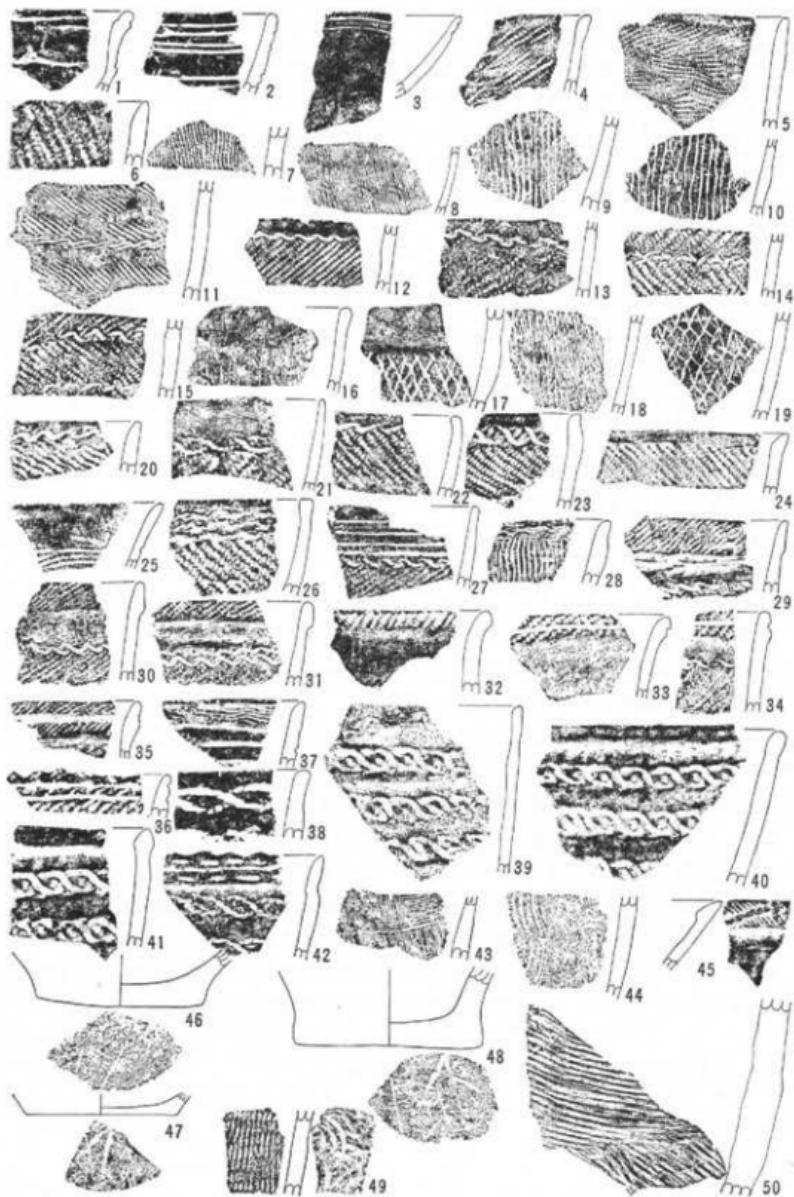
**晩期後葉の土器**（第12図10~45、図版第7図12~33） 本遺跡の主体をなす工字文の土器群で、大洞A式に併行するものである。第12図10~22・27~30・44は浅鉢形土器で、他は深鉢形土器と思われる。工字文は12・27~30・44など浮線によるものと、沈線によるものがあり、その形態も数種類にわけられる。12・44の工字文は菱形状の浮線によっており、長野県の水1式に比定されるものと思われる。10は胴部に最大径があり、頸部から「く」の字に口縁が外反する浅鉢形土器で、口縁は小波状である。文様は最大径の胴部に連続浮線椭円文を施し、下部に3条の沈線をめぐらしている。26・43は工字文の下に縄文を施し、無文のまま他の土器とは異っている。32~34は口縁に継長の刻目を加え、体部に工字文を施している。45は浮線工字文が間をおいて2条体部に施され、口縁に2条の沈線がめぐらしている。この工字文の土器群は黒褐色を呈するものが多く、焼成が良好なものが多い。第13図1~3は口縁に沈線が施文された浅鉢形土器で、工字文のグループに入るのではないかと思われる。

**粗製土器**（第13図4~44、図版第7図35~43、図版第8図1~22） 羊歯状文や工字文などの文様をもたない、所謂簡らない土器—粗製土器の一群である。第13図4~6は単節の縄文原体を回転させたもので、7~10は燃糸文、11~15は胴部に接縫縄文を加えた縄文が施された土器である。16~19は網状燃糸文のグループである。20~24・26~28は口縁に接縫縄文を施しており、27は口縁に5条の沈線を横走させている。29~37は折り返しなどで肥厚した口縁に、繩文あるいは棒状工具による波状（37）などを施し、胴部に接縫縄文等を施文した深鉢形土器である。38~42は無文地上に接縫縄文が数段施されており、本遺跡の特徴的な粗製土器の一群である。43・44は条線文を直・曲線に走らせた土器である。

**浅鉢形土器**（第13図45） 口縁内面の繩文地上に粘土紐を貼り付けた土器で、外面は無文となっている。いずれの時期に属するか不明であり、ここにあげておいた。

**縄文土器の底部**（第13図46~48、図版第8図23） 底面に木葉痕がみられる土器をここにあげてみた。これらは平底で、深鉢形土器の底部と思われる。

**2. 土 製 品**（図版第8図24） 本調査で出土した土製品は、高さ6cmの頭部右半分が欠けた小形土偶の一点だけである。乳房は丸く突き出し、顔面は頭部と一諸になり省略され、胸部から胴部にかけて三角形の印刻文が施されている。<sup>(註1)</sup> 乳房の有無を除けば越路町朝日遺跡の土偶と全く同じ形態・文様のものである。手足は丸く簡略に表現されている。



第13圖 繩文土器・須恵器・中世陶質土器 (1 : 3)

3. 石 器 (第14図、図版第8図25~32) 本遺跡の石器類は石鎌・石斧・板状石器・石皿・石棒等で、平箱約3箱を数える多量の石器が出土した。

石 鎌 (第14図1~16、図版第8図25~26) 約50点の石鎌が出土している。1はえぐり込みのある無柄石鎌で、先端部を欠いている。2~11は有柄のもので、3・4は刃部のバランスが大きくずれている。12・13は棒状石鎌で、14~16は大形の菱形を呈する石鎌である。石材は玉髓・鉄石英等を多く利用している。

石 斧 (第14図17~25、図版第8図27~29) 打製・磨製あわせて約30本の石斧が本調査で出土している。第14図17~19は打製石斧で、17は片面の多くに自然面を残す粗雑な剥離による大形品で安山岩を利用している。18・19は頁岩を利用したもので、18は片側にのみ剥離を加え、それも2個の突起を作り出でて鉄鉈に類似した形状をつくり出している。19は刃部のみ剥離を行った局部打製石斧とでも呼ぶべきものである。20~22は小形磨製石斧でよく研磨されている。

板状石器 (第14図26~37) 扁平な石の周囲を台形状に打ち欠いて刃部をつくり出した石器で、本地方特有のものである。石質は26・31が石英質の他は頁岩を用いている。

磨 石 (第14図38・39) 平箱約1箱の磨石が本調査で出土した。形態や大きさなどはほぼ図示したものと同じで、丸くきれいに全体が磨滅していた。

石 盔 (第14図40、図版第8図32) 10点ほど出土した。第14図40は河原石の中央部に磨滅痕が認められるもので、石皿はこの他に、中央部が深く凹んだものもあった。

石 鍤 (第14図41) 本遺跡で出土した石鍤はこの1点だけである。扁平な河原石の両端にえぐり込みを入れた簡単なものである。

凹 石 (第14図42・43) 凹石の出土も少なく約5点しか出土していない。42・43は石の両面に断続的に3~6個の凹みがみられる。

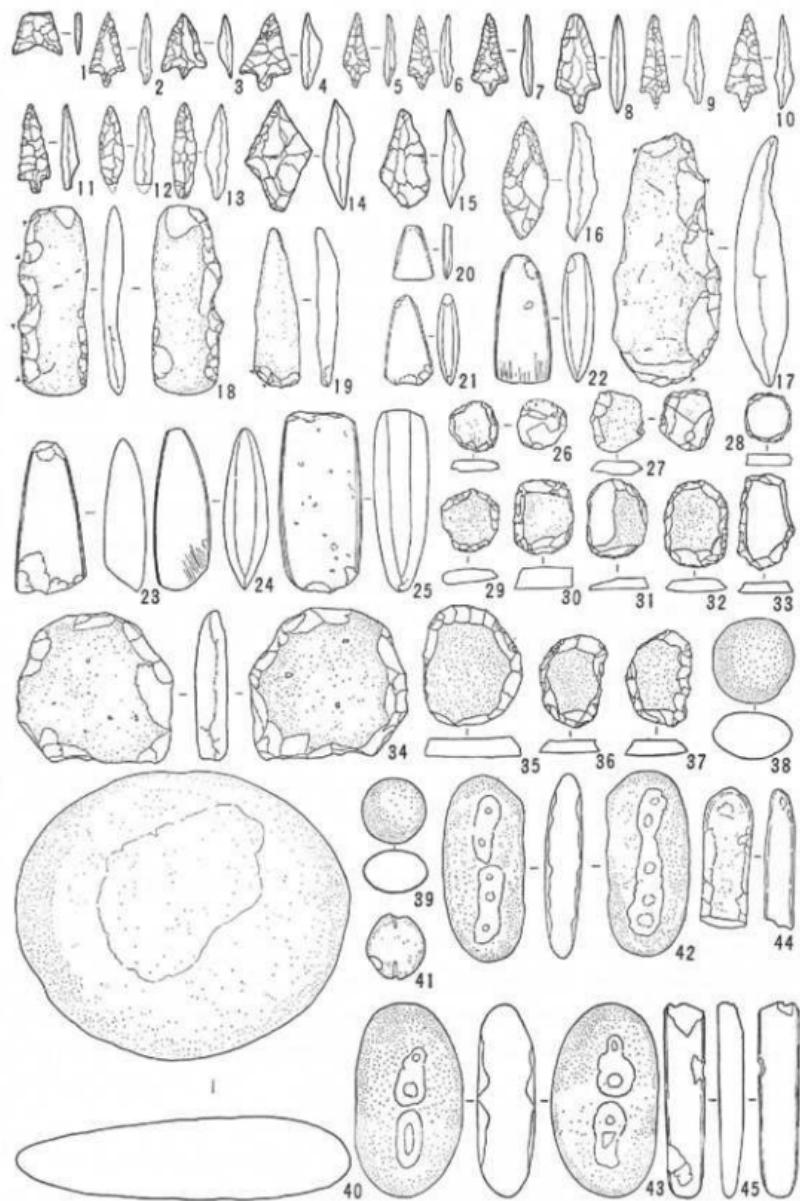
石 棒 (第14図44・45、図版第8図30・31) 上半部、下半部だけが残存しているもので、これといった加工一線刻などは加えられていない。粘板岩を利用している。

4. 須 惠 器 (第13図49、図版第8図33) 青灰色を呈する須恵器が1点だけ出土した。外面には櫛状叩目が、内面に青海波の叩目が施された菱形土器の胴部破片である。

5. 中世陶質土器 (第13図50、図版第8図34~37) 外面に平行条線の叩目がある珠洲系陶質土器 (第13図50) と、内外面とも赤褐色を呈する越前系陶質土器 (図版第8図35~37) が第2号溝付近から出土した。第13図50は叩目の方向から、より底部に近い菱形土器と思われる。

(駒形 敏朗)

註1 中村孝三郎他「朝日遺跡」越路町教育委員会 昭和40年



第14図 石 器 (1~16…1 : 2 17~45…1 : 4)

## V まとめ

いままで本調査で発見された遺構や遺物について簡略ながら述べてきたが、ここでそれらをいま一度振り返りながらまとめてみよう。

本遺跡からは縄文後期前葉の三十種場式と晩期後葉の大洞A式を主体として、後期から晩期全般にわたる土器が出土している。三十種場式は遺跡東側のグリッドK~Oに限定するよう分布していた。三十種場式は縁帶文と柄状把手の土器が主体的に出土し、少量ながら刺突文の土器が併出していた。この現象は県内における該期の遺跡と同じあり方を示していた。

縄文後期中葉から晩期後葉の土器はY軸25~140にかけて分布しており、後期中・後葉はY軸25~40に、晩期全般はY軸40~140に分布し、ピット群との関係を示唆していた。晩期の土器は前葉が三叉文や玉抱き三叉文それに羊歯状文、中葉が雲形文、後葉が工字文と大洞B~A式の各型式における文様の主体が本遺跡出土の土器にみられ、東北地方の亀ヶ岡式土器の影響を色濃く受けており、本遺跡も亀ヶ岡文化圏の範疇に含まれると考えられよう。

次に粗製土器をみてみると、綾絡縄文を施したものが多く、本遺跡のひとつの特色であろう。ピット群Bの8P・9Pでは大洞A式の工字文の浅鉢形土器に併せて頸部あるいは胴部に綾絡を加えた縄文を施した深鉢形土器が出土しており、大洞A式の精製土器とセットをしていた。晩期の土器群に綾絡縄文の粗製土器が併出しているのは、越路町朝日遺跡、見附市耳取<sup>(註1)</sup>遺跡などがあり、朝日は大洞C<sub>1</sub>・C<sub>2</sub>式に、耳取ではC群の大洞A式に併っていた。これらから本遺跡の綾絡縄文の土器の多くが晩期大洞C<sub>1</sub>~A式に併うのではないかと考えられる。

本調査では無数のピットと溝が発見され、第2号溝の性格は調査面積が小規模なため把握できなかった。ピットは試掘調査時の黒色土の円形の落ち込みを精査して、第4図のように掘り方と柱痕とに区分される柱穴であることが判明した。柱をおさえる根固めには掘り出した土砂をつめたり、礫をめぐらす方法をとったりしており、また湧水などによる根腐れを防ぐために底面に小砂利を敷きつめるなどの工夫がされていた。このようなやり方は他遺跡の該期の柱穴の多くとはその様相を異にしている。

本県で縄文晩期の住居址は中里村泉竈寺、小国町延命寺、糸魚川市細池、三条市上野原などの遺跡で発見されており、これらは全て竪穴式住居址である。これらの住居址と本遺跡の柱穴群を比較すると、炉・周壁・周溝の有無に相違がみられ、また、柱穴の配列や対応関係もつかめず、いかなる様式の住居が本遺跡の柱穴群を利用して構築されているかは今後の問題となる。

(駒形 敏朗)

註1. 中村孝三郎他「朝日遺跡調査報告書」越路町教育委員会、昭和40年

2. 関雅之「耳取遺跡」見附市教育委員会、昭和46年

3. 金子拓男「新潟県泉竈寺遺跡における晩期住居址について」上代文化第34輯、昭和39年

4. 金子拓男他「縄文時代の延命寺ケ原」小国町教育委員会、昭和44年

5. 寺村光晴他「細池遺跡」糸魚川市教育委員会、昭和49年

6. 「上野原」三条商業高校社会科クラブ考古班、昭和43年



遺跡遠景（東から）



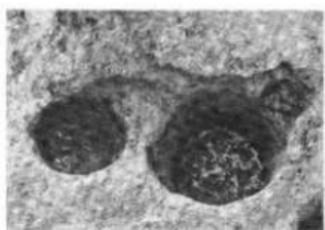
遺跡近景（東から）



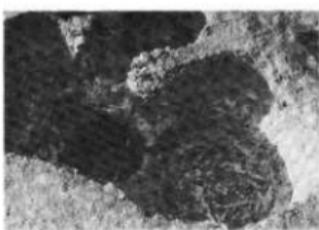
ピット群A（西から）



ピット群B（北から）



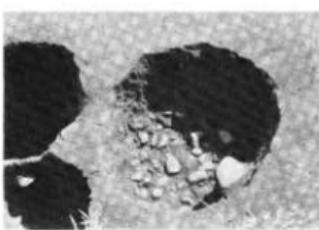
ビット群A—15P



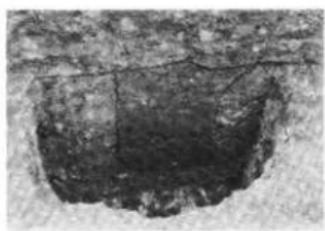
ビット群A—12P



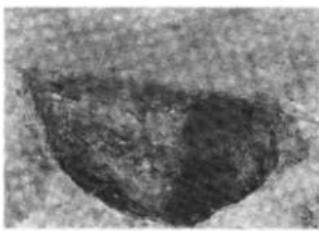
ビット群A—4P



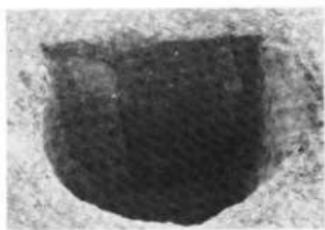
ビット群B—26P



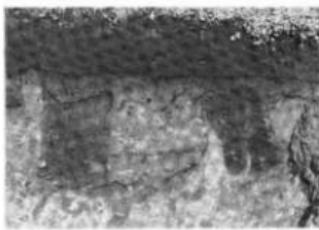
ビット群A—12P



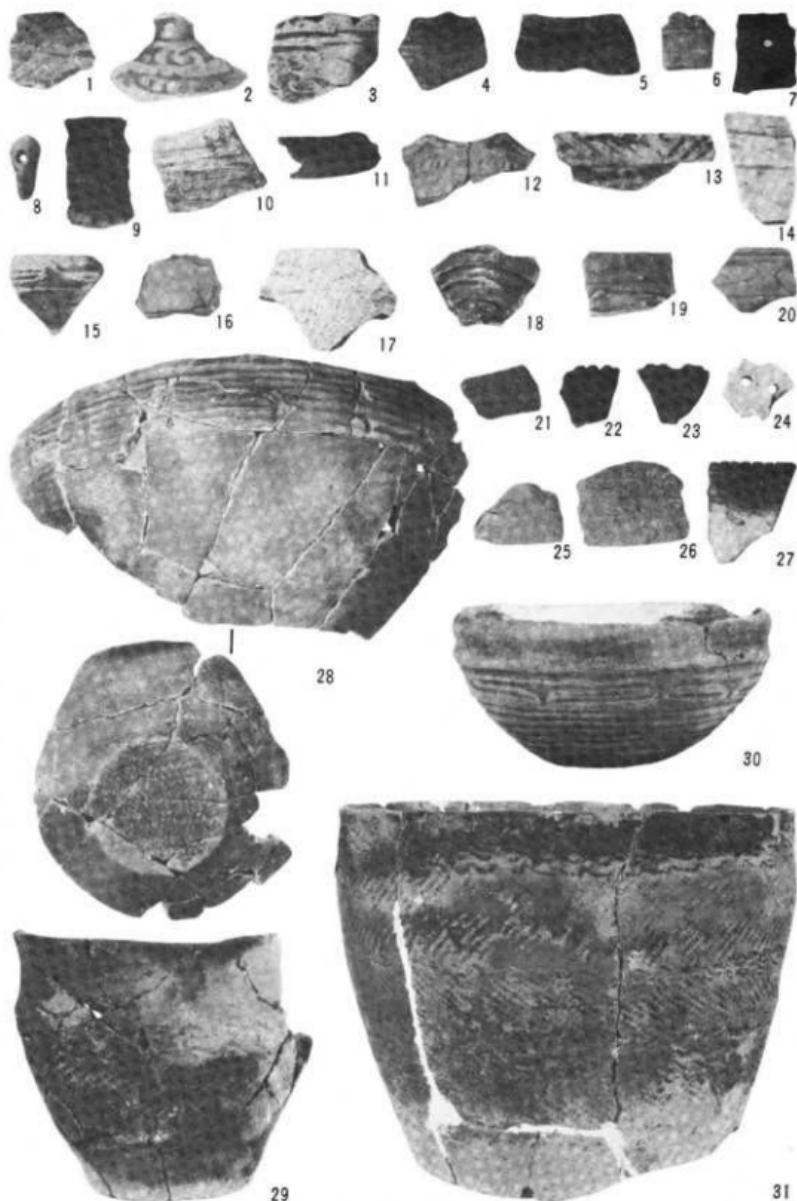
ビット群B—7P



ビット群B—15P



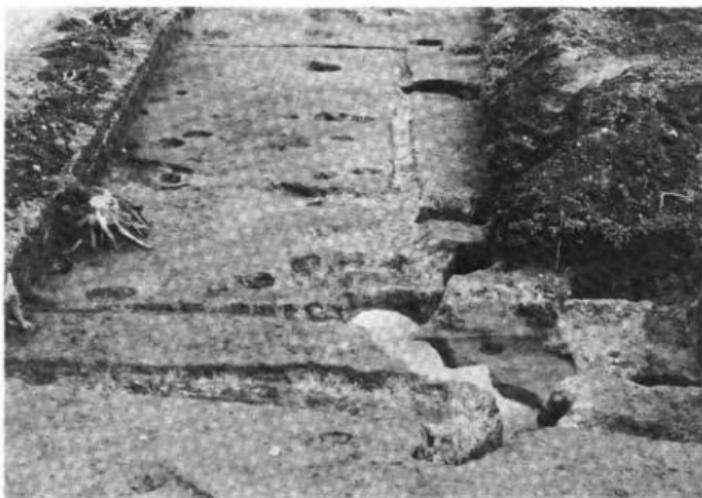
ビット群B—10~12P



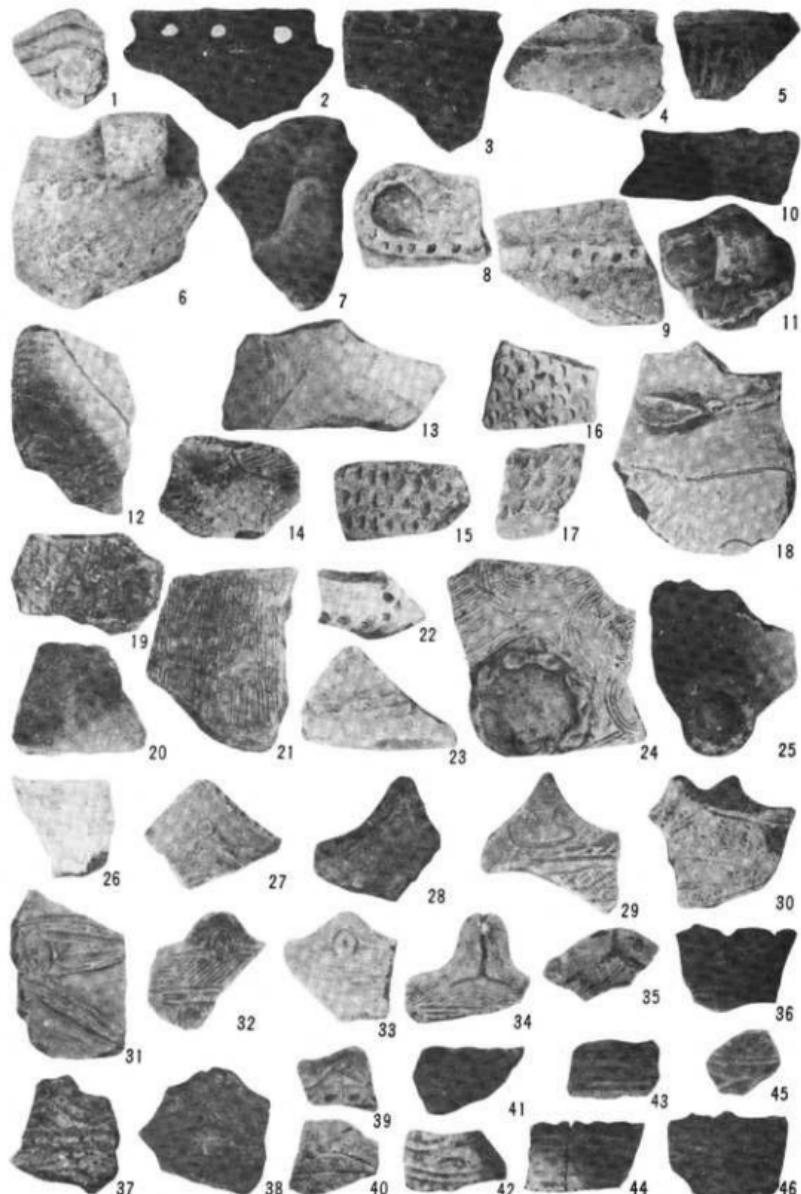
ビヤト群出土遺物 (1 : 3)



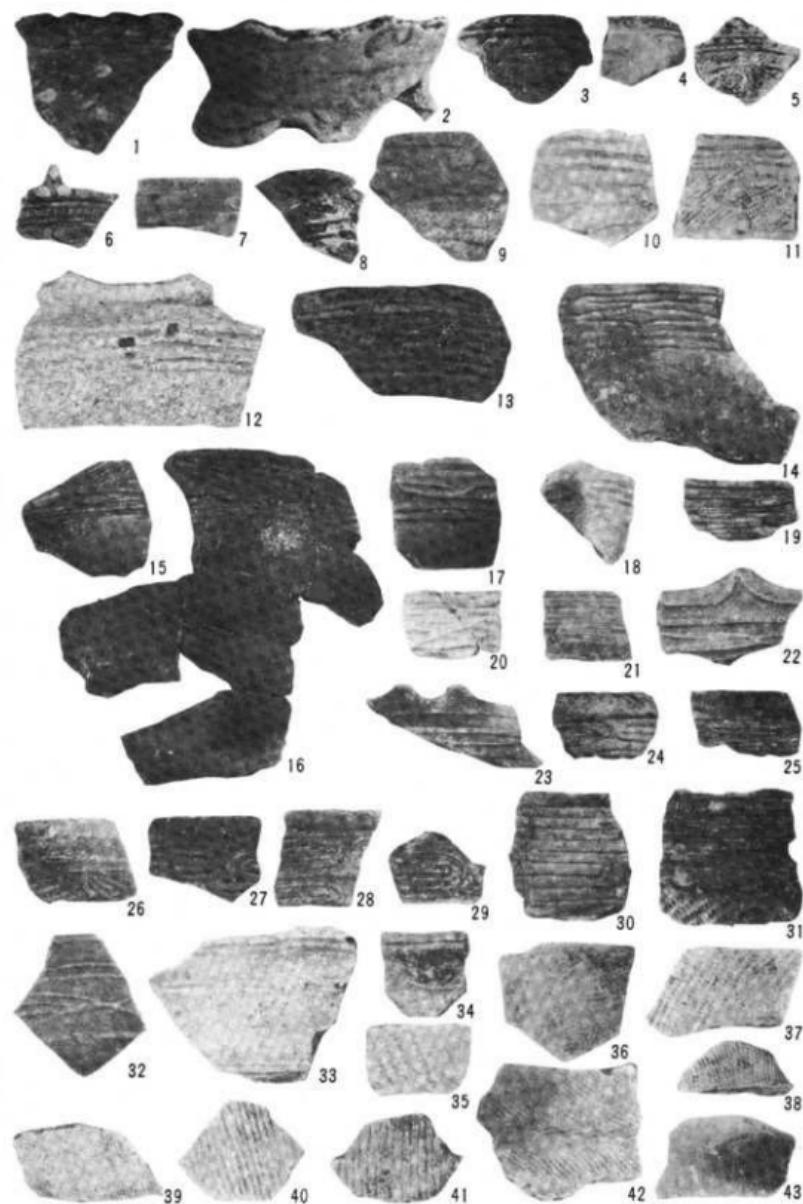
第2号溝（東から）



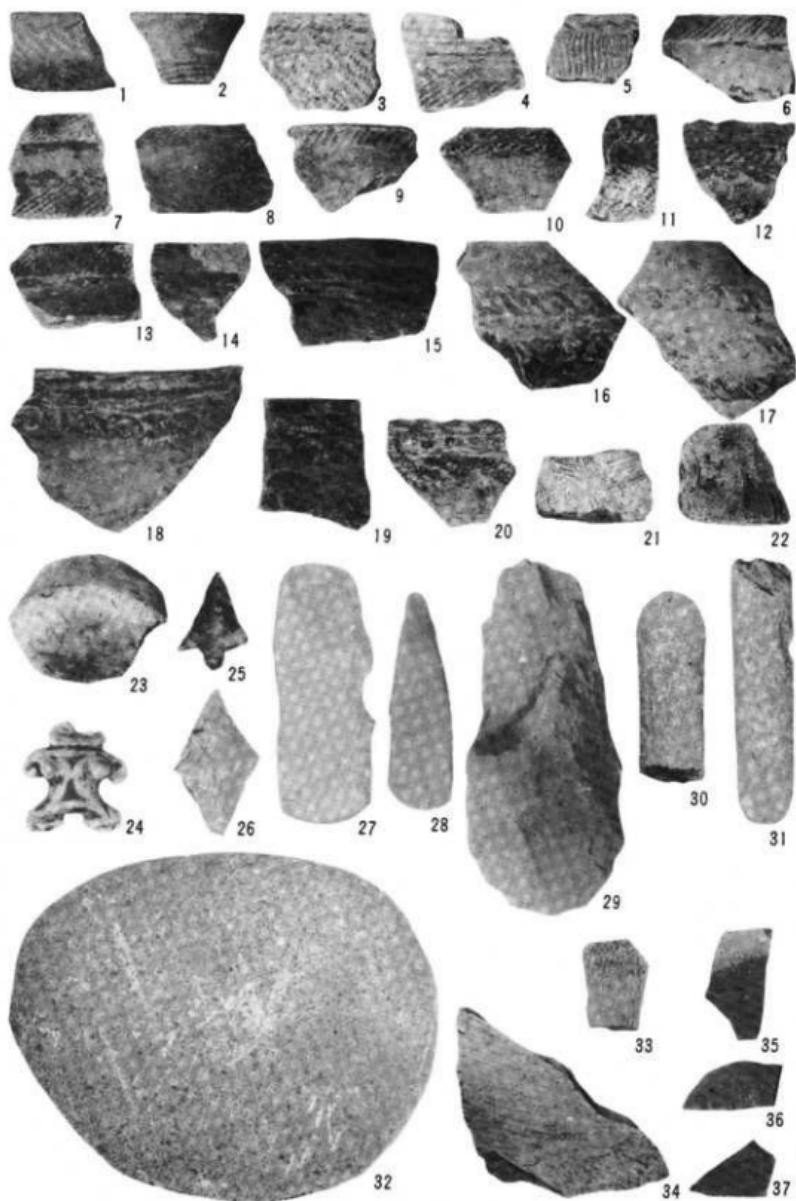
第2号溝（西から）



縄文土器 (1 : 3)



縄文土器 (1 : 3)



龍文土器(1~23)・土偶(24)・石器(25~32)・須恵器(33)・中世陶質土器(34~37)

(25・26…1:1.5、他は1:3)

埋蔵文化財発掘調査報告書

藤橋遺跡

昭和52年3月25日 印刷

昭和52年3月30日 発行

発行 長岡市藤橋遺跡等発掘調査委員会  
印刷 株式会社 第一印刷所